

唐津市文化財調査報告書 第176集

からつじょうあと
唐津城跡(IX)

—— 唐津城天守閣空調設備室外機設置に伴う文化財調査 ——

2018.2

唐津市教育委員会

序 文

佐賀県西北部に位置する唐津市は、玄界灘を挟んで朝鮮半島に面しているという立地条件から、古くから大陸との交流が盛んに行われ、大陸文化の受容口として、非常に重要な役割を担ってきました。このことは、当市に所在する遺跡、あるいはそこから出土した遺物などから窺い知ることができます。しかし、唐津城跡などを始めとするこれらの貴重な遺跡は、様々な開発行為によって常に消滅の危機に瀕していることもまた事実です。

唐津市教育委員会では、開発行為等によりやむを得ず保存できない埋蔵文化財については、事前の発掘調査を行い、調査記録を残すことで、消滅した遺跡の活用にも力を入れています。

本書は、唐津城跡天守台石垣北西裾部の調査結果の記録です。本書が、地域住民の皆様はもとより、市民各位の埋蔵文化財保護に対するご理解を深めるとともに、学術研究の分野においてもご活用いただければ幸いなこと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理に至るまで、作業員や整理員の方々をはじめ、多くの人々のご理解とご協力に対しまして、心から感謝の意を表するものであります。

平成30年2月28日

唐津市教育委員会 教育長 稲葉 繼雄

例 言

- 1 本書は、唐津城天守閣空調設備室外機設置に伴い、唐津市教育委員会が平成29年4・5月にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、唐津市（商工観光部観光課）から依頼を受け、唐津市教育委員会がこれにあたった。調査費用は、観光課予算を再配当し、生涯学習文化財課にて執行した。
- 3 調査開始前の表土掘削は、株式会社岸本組に委託して実施した。
- 4 現地での調査は、立谷聰明が担当した。遺構平面・石垣立面実測（写真測量）は、株式会社とつべんに委託し実施した。
- 5 遺物の実測は井上美代子が行い、遺構・遺物の写真撮影は立谷が行った。
- 6 本書の執筆・編集は、井上の協力を得て、立谷が担当した。

凡 例

- 1 遺跡の名称は「唐津城跡」、略号は「K RJ」である。
- 2 Fig. 1 は唐津市建設部都市整備課発行の「唐津市全図」(1:50,000)を使用した。
- 3 掃図における方位のうち、地図及び遺構平面図は座標北(G N)を使用した。
- 4 遺物の法量はcm単位であり、遺物・遺構写真の縮尺は不統一である。
- 5 石垣番号については、平成20年度から実施している石垣再築整備事業に準拠した。
- 6 PL-1 の昭和38年の写真、Fig. 4 の原図は唐津市まちづくり課から提供を受けた。

目 次

本文目次

第Ⅰ章 調査の経過			
第1節 調査に至る経過	1	第3節 唐津城跡調査の概要	4
第2節 調査体制	1	第Ⅲ章 文化財調査成果	
第3節 調査の経過	1	第1節 唐津城跡における調査地點	6
第4節 調査日誌	2	第2節 調査の方法	6
第Ⅱ章 環 境		第3節 層序	7
第1節 地理的環境	3	第4節 検出遺構	11
第2節 歴史的環境	3	第5節 出土遺物	13
		第6節 調査成果のまとめ	17

挿図目次

Fig.1 唐津市内主要遺跡分布図 (S=1/250,000)	4	Fig.7 A-A'断面・B-B'断面上層図 (S=1/30)	10
Fig.2 唐津城跡主要調査位置図 (S=1/3,000)	5	Fig.8 4面石垣立面オルソ図 (S=1/60)	11
Fig.3 唐津城跡本丸調査区位置図 (S=1/600)	6	Fig.9 5面石垣立面オルソ図 (S=1/60)	12
Fig.4 模造化粧櫓周辺実測図一部トレース (S=1/100)	7	Fig.10 出土遺物実測図① (S=1/3)	15
Fig.5 調査区平面オルソ図・実測図 (S=1/60)	8	Fig.11 出土遺物実測図② (S=1/4)	16
Fig.6 調査区北壁上層断面図 (S=1/30)	9	Fig.12 出土遺物実測図③ (S=1/4)	17

表 目 次

Tab.1 出土遺物観察表	14
---------------	----

図版目次

PL-1 【調査区・石垣近景】	
①2・3・6面石垣近景: S38年（南西から）	
②2~4・6面石垣近景: 現在（南西から）	
③3・4面石垣近景: S38年（西から）	
④4面石垣近景: S38年（西から）	
⑤確認調査実施前近景（北西から）	
⑥表土掘削業務終了後近景（北西から）	
⑦東西土層観察畦撤去前状況（北西から）	
⑧掘削完了状況（北西から）	
PL-2 【調査区・石垣近景】	
①掘削完了状況（西から）	
②4面石垣埋没部分近景（西から）	
③5面石垣埋没部分近景（北から）	
④5面石垣根石付近景（北から）	
PL-3 【石垣近景・出土遺物】	
①調査終了後調査区近景（北から）	
②4面埋没部分刻印拓本採取前（西から）	
③4面埋没部分刻印拓本採取後（西から）	
④・⑤陶磁器類（内外面）(Fig.10-1~9)	
⑥~⑧軒丸瓦（瓦当面・裏面）(Fig.11-10~17)	
PL-4 【出土遺物】	
①~③軒丸瓦（瓦当面・裏面）(Fig.11-14~20)	
④~⑥軒平瓦（瓦当面）(Fig.11-21~27)	
⑦・⑧鰐瓦・鬼瓦（外内面）(Fig.12-28・29)	

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成29年2月1日、唐津城天守閣の展示リニューアルに伴う空調室外機設置工事に際して、唐津市（商工観光部観光課）より埋蔵文化財発掘の通知が提出された。工事施工場所は、本丸北西に設けられた帶曲輪のうち、天守台石垣北西裾部に位置する。工事内容は、石垣裾部約18mに対して、地表下0.7mの深さまで杭を入れ、その上に基礎コンクリートを打設するものであった。現地は、唐津城石垣再築整備事業に伴う発掘調査の際、江戸期の遺構の残存が見られた3面石垣に接していることなどから、平成29年2月8・9日に確認調査を実施した。

確認調査の結果、近現代の配管敷設時のかく乱によって、地表下0.7m付近まで乱されていたものの、地表下0.8m地点において、江戸期の盛土層を確認した。そのため、施工時の基礎杭はわずかに届かないと考えられるものの、かく乱の及んでいない範囲にはより浅い位置に江戸期の盛土の遺存が想定されたため、施工時に文化財担当者が立会を行うこととした。しかし、施工前に業者側が実施した地盤調査によって、施工場所の地耐力の脆弱性が明らかとなり、業者側から計画変更の申し出があったため、平成29年3月21日に発注者である観光課と施工業者、天守閣内の整備を管轄する都市整備部建築住宅課、生涯学習文化財課の4者で協議を行った。その結果、地表下約1.5mまでの地盤改良を行う必要が生じ、やむを得ず文化財調査による記録保存を実施することとなり、平成29年4月4日付けて唐津市（商工観光部観光課）より発掘調査依頼が提出された。

第2節 調査体制

文化財調査及び資料整理、報告書作成は唐津市教育委員会が主体となり、下記の調査体制で実施した。

調査主体 唐津市教育委員会

総括 唐津市教育委員会 教育長 稲葉 繼雄

事務局 唐津市教育委員会 教育部長 金嶺 栄作

唐津市教育委員会 教育副部長 中尾 修二（生涯学習文化財課長兼）

唐津市教育委員会生涯学習文化財課 文化財調査係長 仁田坂 晃

唐津市教育委員会生涯学習文化財課 文化財調査係 美浦 雄二

唐津市教育委員会生涯学習文化財課 文化財調査係 坂井 清春

唐津市教育委員会生涯学習文化財課 文化財調査係 鮎川 和樹

調査員 唐津市教育委員会生涯学習文化財課 文化財調査係 立谷 聰明（事務局兼）

文化財作業員 志氣 勝、谷口 陽一、戸田 正一、野崎 元則、宮口 真由美

文化財整理員 井上 美代子、古賀 友里奈（作業員兼）

※作業員・整理員は敬称略・五十音順

第3節 調査の経過

確認調査の結果から、調査区全体に礫が厚く堆積している事が予想されたが、調査区点は重機などの搬入が困難な場所であった。このため、平成29年4月19日に、先行して人力による表土掘削業務を委託し、礫屑の除去を行った。発掘調査には4月24日に着手した。まず、調査区の北壁に沿ってサブ

トレーニングを設定し、遺構面の検出を目指し掘削した。しかし、調査区北側には埋没していた樹木の幹・根が広範囲に遺存していることが明らかとなり、北壁サブトレーニングの拡張をしたもの、根かく乱によって遺構面の検出は困難であった。そこで、根かく乱の影響が比較的軽微と思われた調査区中央に、新たに東西土層観察畦を設定し、畦北側のサブトレーニングの掘削を進めた。また、表土掘削によって掘り出した礫が、予想を上回る量であり、6面石垣前に設定した排土置き場を圧迫する状況となつたため、排土置き場の拡張を行った。さらに、東西土層観察畦の北側サブトレーニング内、4・5面石垣裾部の掘削を進めたところ、サブトレーニング内にて、5月1日に江戸期の遺構面を検出し、5月8日に地山の検出に至った。4・5面石垣の裾部では、樹木の根が石垣石材に沿って伸びていたため、根の影響で土が乱され、根石付近の地業の状況を確認することは出来なかつたものの、ともに5月15日に根石を検出した。その後、写真測量を実施し、4・5面石垣の立面図・調査区平面図を記録するとともに、手実測にて調査区北壁・南壁（B-B'断面）、東西土層観察畦（A-A'断面）の土層図作成を行つた。

現場作業は、5月17日に完了し、埋め戻しを行わず施工業者に引き渡した。業者側が、遺構面からの地盤調査を再実施したところ、調査完了状態からの基礎施工で十分な地耐力が得られるという結果となり、当初の予定よりも遺構面を亂すことなく施工できることとなつた。

第4節 調査日誌

4/19	表土掘削業務委託実施。 表土・礫層除去完了。	5/8 東西土層観察畦上半分撤去。北側サブトレーニング内3層掘削、地山検出。
4/24	発掘調査開始。調査区北壁にサブトレーニングを設定。2層掘削。	5/12 4・5面石垣裾部掘削。
4/25	2層掘削。樹木の根によるかく乱検出。	5/15 4・5面石垣裾部掘削。根石検出。
4/27	2層掘削。排土置き場拡張。	4・5面石垣水洗・全体清掃作業。 遺構検出状況写真撮影。
4/28	4・5面石垣裾部掘削。排土置き場拡張。 トレーニング中央に東西土層観察畦設定。	5/16 全体清掃作業。写真測量業務委託実施。 SK01半裁。半裁後、写真撮影。
5/1	東西土層観察畦北側のサブトレーニング内にて3層掘削。	5/17 東西土層観察畦北側土層断面図作成。 調査区北壁・南壁断面図作成。
5/2	全体清掃。掘削途中経過状況写真撮影。 東西土層観察畦北側土層断面図作成。 4・5面石垣水洗作業。	4・5面石垣検出刻印拓本採取。 現場作業完了。



4月27日 作業風景（排土置き場拡張作業）



5月2日 作業風景（4・5面石垣水洗作業）

第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境

唐津市およびその周辺の地形は、①東松浦溶岩台地域②松浦杵島丘陵地域③脊振山地西部域④松浦川河口周辺域（唐津平野）⑤島嶼域（東松浦半島沿岸部も含む）の5地域に区分できる。

①東松浦溶岩台地域は、市の北西部に位置している。標高100～200m程度のこの台地は、通称上場台地と呼ばれ、松浦玄武岩類からなる溶岩が東松浦半島の大半を覆っている。また東松浦半島沖には、⑤島嶼部の島々が点在している。市の南西域に位置する②松浦杵島丘陵地は、唐津炭田の石炭層を含む標高200m内外の丘陵性山地であり、松浦川西岸一帯に広がる。市東部の③脊振山地西部域は、花こう岩層からなる脊振山系の西部地域にあたり、標高1000mにもなる山々が連なっている。④松浦川河口周辺域（唐津平野）は、沖積平野が広がっており、「末盛国」と呼ばれた弥生時代から現代まで、唐津の中枢的役割を果たしてきた地域である。この河口一帯では、縄文時代中期以降、松浦川の両岸で砂丘の発達が進む。唐津城跡は河口西岸の砂丘上に二ノ丸・三ノ丸を配置し、三ノ丸の周囲には、城下町（外曲輪）が形成され、現代の唐津市街地の基礎となっている。

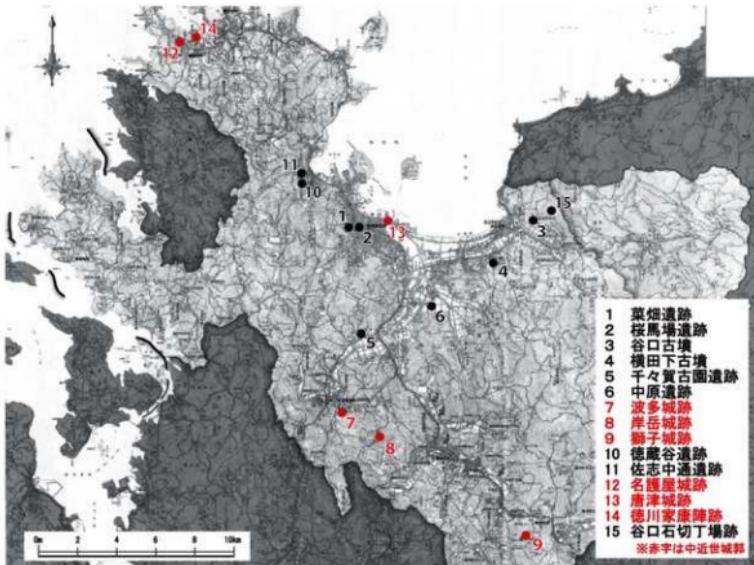
第2節 歴史的環境 (Fig.1)

唐津・東松浦地方の歴史的変遷は、その地理的環境に大きく影響を受けて進行してきた。

旧石器時代の遺跡は、上場台地に集中して見つかっており、遺跡の集中度は北部九州でも屈指である。縄文時代早期の遺跡も引き続き上場台地に多い。一方、前期から晚期前半にかけては、上場台地以外の低丘陵地で遺跡の発見例が増加する。晚期中頃から後半になると再び上場台地で遺跡の形成が認められる。このように縄文時代は時期により遺跡の立地に盛衰が見られる。

弥生時代早期以降は、稲作に適した市中・東部の河川流域の低地部の遺跡が中心となる。中期以降は、青銅器や玉類を副葬した墳墓が多く築かれる。後期前半には、桜馬場遺跡の壇棺内から後漢鏡や素環頭大刀が出土している。後期後半～終末期になると、中原遺跡において、自家消費量を遥かに超える量の鐵器生産の痕跡が見つかっている。古墳時代も弥生時代と同様の遺跡の分布傾向が見られるが、市東部の玉川島流域でも遺跡が増加する。特に前期～中期にかけて九州を代表する谷口古墳や横田下古墳が築かれることは注目すべきである。また後期には島嶼部でも古墳築造が盛んになる。古代の遺跡は、調査例が少ないが、徳須恵川及び松浦川流域の千々賀古園遺跡や中原遺跡で官衙に関連する墨書き土器や木簡などが大量に出土している。また市東部では古代以降、鉄生産に関連する遺跡が多く見つかっている。松浦党が活躍した中世には、波多氏の波多城・岸岳城、鶴田氏の獅子城など、多くの山城が築かれる。近年では、佐賀県教育委員会により詳細な現地調査が実施され、市内の山城は、可能性のあるものを含めると100箇所に迫る数が確認されている（渕ノ上・宮武編2017）。また、調査例は多くないが、山城以外でも徳蔵谷遺跡や佐志中通遺跡など佐志川流域の遺跡で館の可能性がある建物や道路跡が見つかっているほか、大量の輸入陶磁器が出土しており、松浦党佐志氏の繁栄を思わせる。

近世の当地域最大の特徴は、豊臣秀吉による文禄・慶長の役（1592～1598）の際、東松浦半島北西部に名護屋城が築かれたことである。この時、全国120余りの大名が集結し、名護屋城周辺の丘陵に陣屋を構え、城下は全国から集まった商人や職人によって栄えた。しかし、秀吉の死による役の終結を契機として、突如として現れた全国屈指の大都市はその求心性を失い、歴史の表舞台から消えていく。



く。またこの頃、松浦党の党首、波多三河守親の庇護のもと岸岳の山麓に陶器窯が築かれており、後に全国各地に流通する源流となっていく。しかし、波多氏は文禄の役の際に改易となり、その旧領を含む唐津藩12万3千石を所領したのが、初代藩主となる寺沢志摩守広高である。

寺沢広高は、松浦川河口西岸の満島山とその南西に広がる砂丘上に唐津城を築城する。唐津城の築城時期は、慶長7年～13年（1602～1608）とされている。寺沢氏は、唐津城の築城に平行して、松浦川・町田川の大規模な河川改修を行ったと伝えられるほか、獅子城や岸岳城などを、石垣造りの城への改修を行っている。また、塩害対策として松を保護し、特別名勝虹ノ松原の原型を整備したのもこの時期である。この他、市東部の玉島川流域では徳川大坂城に石垣石材を供給したと推測されている谷口石切丁場跡が近年確認されており、寺沢氏の関与が想定されている。寺沢氏の断絶後は、譜代大名である大久保・松平・土井・水野・小笠原氏が順に転封を繰り返した後、明治維新を迎へ、現代に至っている。

第3節 唐津城跡調査の概要 (Fig. 2)

唐津城跡は、その文化財公蔵地範囲も広く、現唐津市街地のほぼすべてを含んでおり、開発行為も多いため、確認調査件数は市内でも最上位を占める。これらの確認調査や本調査の結果、その概要が少しづつ判明してきている。昭和61・62年度に実施された、二ノ門堀・締切堀整備に伴う調査では、石垣測量が行われた。測量調査の結果、二ノ門掘石垣では、ほぼ五間単位で石垣の積み境が確認でき、石垣普請時の区割りの存在が想定されている。平成7年度に実施された本丸斜行式エレベーター建設に伴う調査では、本丸北西部から満島山の裾廻りに位置する西腰曲輪部分の発掘が行われた。西腰曲

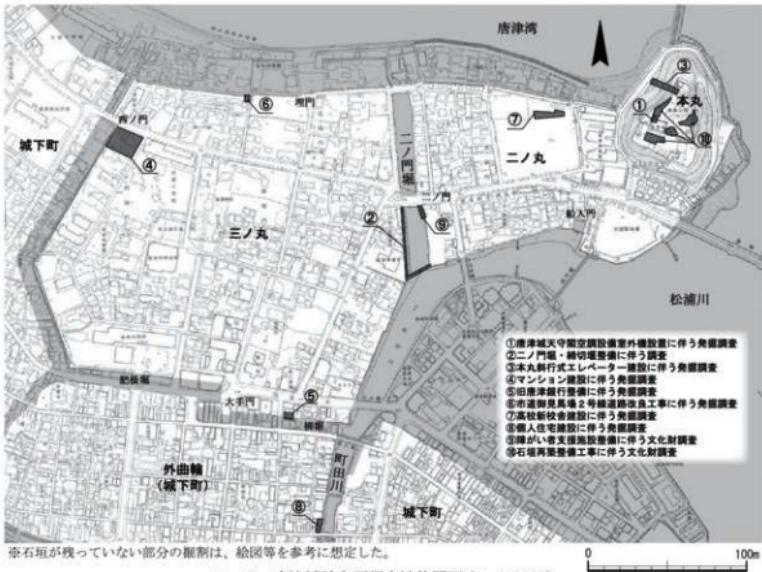


Fig.2 唐津城跡主要調査位置図 (S=1/3,000)

輪から出土した瓦片の中には、名護屋城で出土している桐文瓦と同范瓦が見られ、その関連性を示唆するものであった。平成21年度に三ノ丸南端付近で実施された旧唐津銀行整備に伴う調査では、三ノ丸と外曲輪（城下町）を隔てる柳堀北縁の石垣の一部が検出された。平成24年度に実施された市道御見馬場2号線道路改良工事に伴う調査では、三ノ丸北縁石垣の発掘調査・解体調査を併せて行った。その結果、築石側と盛土側での栗石の使い分けの状況など、砂丘上への石垣普請の様相が明らかとなった。また、平成20年度から本丸一帯で行われている唐津城跡石垣再築整備事業に伴う文化財調査では、既存の石垣の裏から旧石垣などの発見が相次いでおり、定説より遡る名護屋城併行期の満島山に何らかの拠点が存在していた可能性が浮上してきている。

＜参考文献＞

- 川添 一・松岡 史 1962 「第一編 総論」『唐津市史』唐津市
 田島龍太 1987 『唐津城跡（I）』唐津市文化財調査報告書第24集 唐津市教育委員会
 田島龍太 1988 『唐津城跡（II）』唐津市文化財調査報告書第29集 唐津市教育委員会
 田島龍太 1996 『唐津城跡（III）』唐津市文化財調査報告書第70集 唐津市教育委員会
 草場誠司 2005 『唐津城跡（IV）』唐津市文化財調査報告書第123集 唐津市教育委員会
 隈内康光 2011 『唐津城跡（V）』唐津市文化財調査報告書第158集 唐津市教育委員会
 坂井清春 2013 『唐津城跡（VI）』唐津市文化財調査報告書第161集 唐津市教育委員会
 坂井清春 2013 『唐津城跡本丸1』唐津市文化財調査報告書第164集 唐津市教育委員会
 草場誠司 2014 『唐津城跡（VII）』唐津市文化財調査報告書第165集 唐津市教育委員会
 坂井清春 2015 『唐津城跡本丸2』唐津市文化財調査報告書第170集 唐津市教育委員会
 永田 淳 2016 『唐津城跡（VIII）』唐津市文化財調査報告書第173集 唐津市教育委員会
 渕ノ上隆介・宮武正登編 2017 『佐賀県の中世城館 第4集』佐賀県文化財調査報告書第216集 佐賀県
 教育委員会

第Ⅲ章 文化財調査成果

第1節 唐津城跡における調査地点

今回の調査地点は、本丸北西に設けられた帯曲輪のうち、天守台石垣北西（4・5面石垣）の入隅部の裾、約18mが対象である（Fig.3：右）。調査地点周囲の石垣の内、2・3・6面石垣は、平成20年度から行われている石垣再築整備事業に伴う文化財調査が実施されており、江戸期中の石垣修復状況が明らかになっているほか、石垣前面の石組溝などの遺構が検出されている。

また、江戸期の絵図（Fig.3：左）では、4・5面石垣がなす入隅部は確認できず、6面石垣が北に延長し、櫓台状の空間を形成しているように見える。他の絵図においても、天守台石垣が強調され、明確に入隅部を表現しているものは少ない。よって、調査地点の詳細状況が不明であり、6面石垣北側への埋没石垣の延長も推測されたため、石組溝や石垣の検出に留意し調査を行った。

第2節 調査の方法

確認調査によって、地表下約0.4m～0.6m地点まで、直径20cm大の円礫・角礫が大量に含まれる層を確認していた。この礫は、模擬天守北側の模擬付櫓周辺の実測図（昭和42年）内において、4面石垣に「石垣破損」と記されていることから、4面石垣から流出した栗石と推測される（Fig.4）。栗石層の除去にあたり、重機による表土掘削を考慮したものの、調査地点には重機の搬入路が存在しなかったことから、発掘調査に先行して、人力による表土掘削を委託し、栗石層の撤去を行った。

確認調査の結果から、場所によっては地表下約0.7m地点まで近現代のかく乱が及んでいることや、地表下0.8m地点に江戸期の盛土が残存していることが判明していた。そのため、調査方法としては、遺構面の検出を目的として、調査区の北壁にサブトレーナーを設定、先行して掘削を進めた。しかし、樹木の幹や根が密集しており、調査区北壁での先行掘削を断念し、調査区の中央部に東西土層観察窓を設定し、観察窓北側にサブトレーナーを新たに設け、掘削を行った。

結果的に、調査区のほぼ全面に樹木の根が入り込んでいることが判明し、近現代のかく乱が及んでいない場所でも、根の影響によって土が乱されており、特に4・5面石垣の根石付近では、根が石材に密着するよう伸びていた。

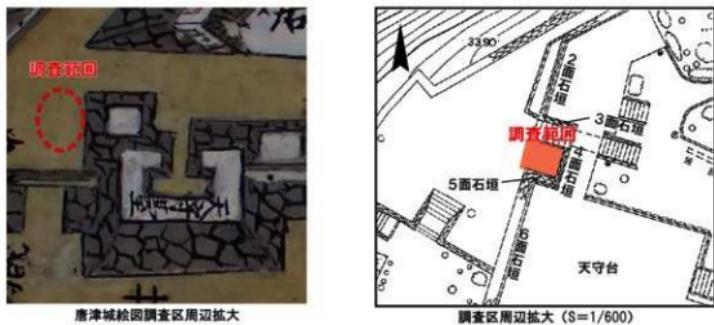


Fig.3 唐津城跡本丸調査区位置図

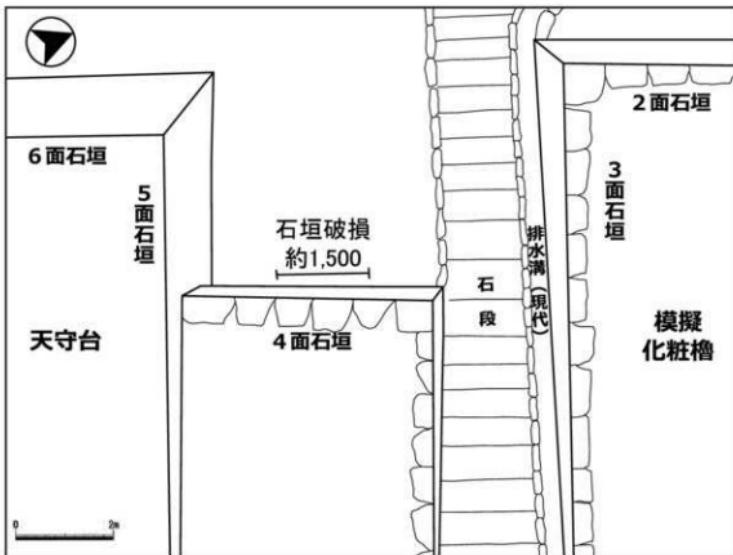


Fig. 4 模擬化粧樋周辺実測図一部トレース (S=1/100)

また、東西土層観察畦北側サブトレンチでは、写真撮影・断面図作成を行い、畦を撤去しつつ掘削を進めた。遺構面、4・5面石垣の根石の検出後には、写真測量を実施した。

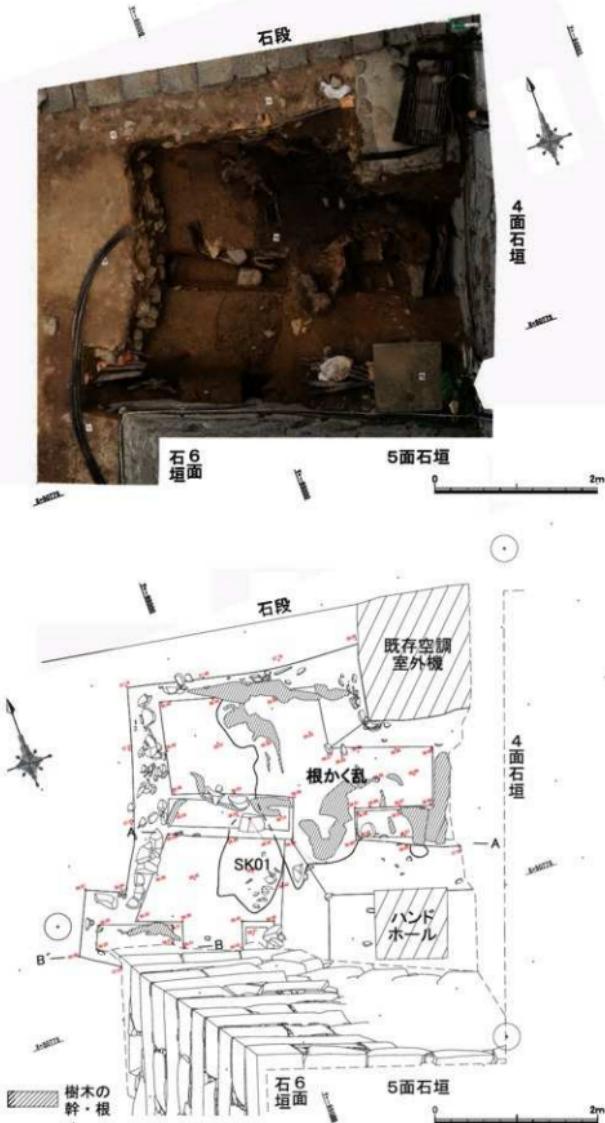
第3節 層序

確認調査の結果から、表土層および現代盛土・かく乱層を1層、廃城以降の堆積土を2層、江戸期整地層（造成盛土）を3層とし、これに本調査によって検出した地山層（4層）を加えたものが基本層序である。さらに各層内を細分化したものは、アルファベット小文字で枝番を付した。各層の詳細については、Fig.6・7の各断面図を参照されたい。

1層は、唐津城天守閣の建築時に前後すると考えられる配管施工時のかく乱（1a・1b・1d・1f層）と、4面石垣の崩落（おそらく昭和40年前後）に伴う流出栗石の層（1c層）からなる。配管敷設時のかく乱は、4・5面石垣の裾に沿っている。栗石層は、調査区の中央付近から西側（斜面下側）に向けて、放射状に堆積していたようであり、調査区の北側・南側では、堆積は比較的薄い。

2層は、唐津城の廃城以降に廃棄された瓦片を含む褐色粘質土を主体とし、遺構面である3層を掘り込んだ際の混入と考えられる花こう岩のチップを少量含む。このうち、2b・2c層は、かく乱の堀方を認識できたものの、2a層は含まれる瓦片の状況などから複数回のかく乱を受けたと推測できるが、個々の堀方の識別はできなかった。また、樹木の幹・根によるかく乱（2d・2e層）が調査区のほぼ全域に及んでおり、遺構面を大幅に乱す原因となっていた。

今回の調査では、標高36.5m付近で遺構面（3層）、標高36.2m付近で地山（4層）を検出した。石垣再築整備に伴う発掘調査によって検出した3面石垣前の遺構面の高さも標高36.5m付近であること

Fig. 5 調査区平面オルソ図・実測図 ($S=1/60$)

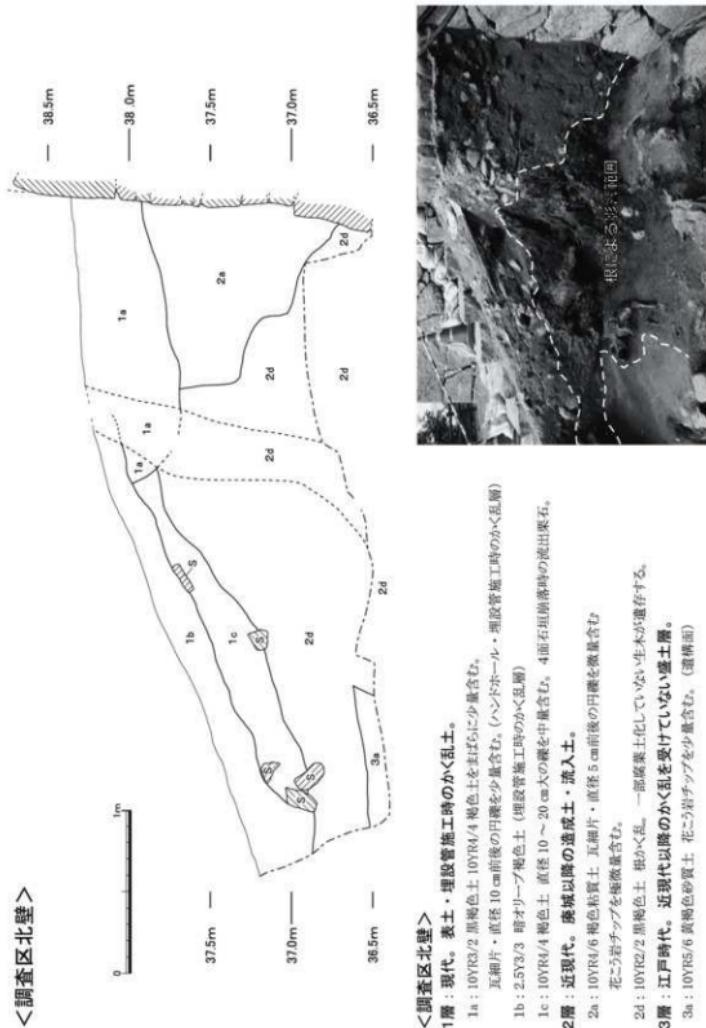


Fig. 6 調査区北壁土壁断面図 (S=1/30)

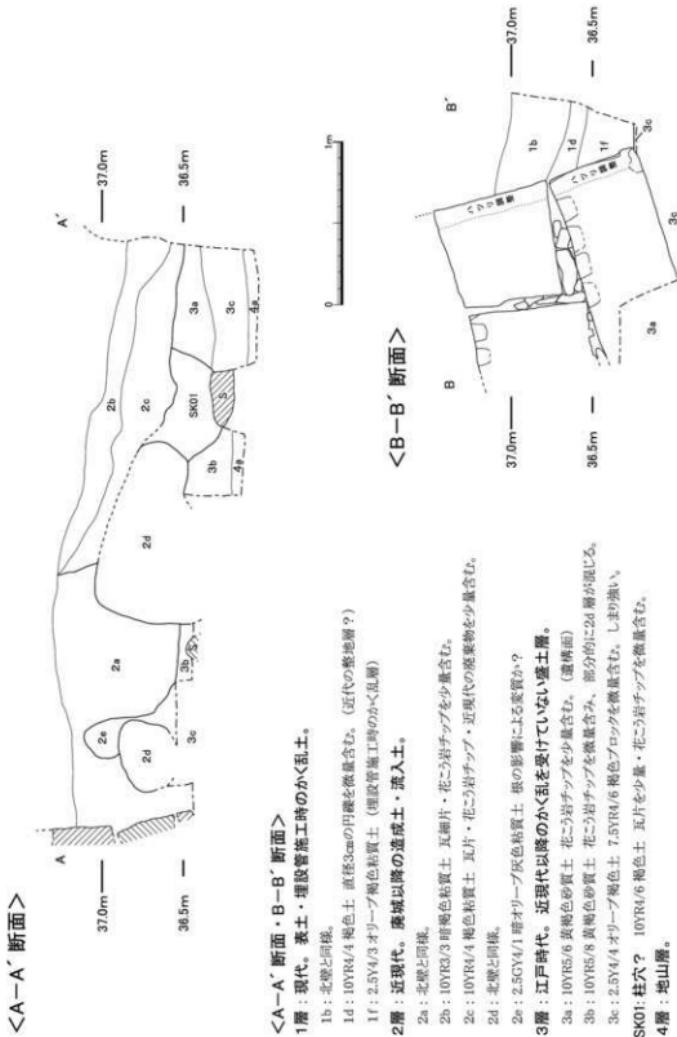


Fig. 7 A-A' 断面・B-B' 断面上層図 (S=1/30)

から、江戸時代において、今回の調査地点を含む天守台石垣北西部一帯は、ほぼ高さの変わらない平坦面をなしていたと考えられる。しかし、検出した遺構面は、根かく乱によって上面を乱されていると考えられ、本来の遺構面は、検出面より高いものと推測できる。このことから、石垣裾部の遺構面は、付近よりもやや高く、満島山西側斜面に向けて水勾配がつけられていた状況を想定しておきたい。

3層の上面（3a層）は、先述のとおり、根の影響によって上面はわずかに削られていると考えられ、3b層は根の影響を受け軟化・変質した3a層と推測される。根の影響は、4・5面石垣の裾部に特に激しく及んでおり、地業の状況を確認することが出来なかった。しかし、かろうじて確認できた範囲では、根石の下に3c層がかんでいる状況がみられた。さらに3c層は、強いしまりをもっており、その検出レベルからも、4・5面石垣の根石設置に関連する盛土と推測される。なお、3層は全体的に花こう岩のチップを少量含んでおり、石垣石材の最終仕上げが現地で行われていた状況を示唆する。

4層の地山層は、花こう岩の風化土からなる。東西土層観察柱の下部において、部分的に検出したのみであるが、検出したレベルがほぼ一定であることから、曲輪の造成時に旧地形をならした可能性も考えられる。

第4節 検出遺構

（1）石垣

今回の調査によって、4・5面石垣の埋没部分の状況が明らかとなり、両石垣ともに根石の検出に至った。以下では、4・5面石垣の各石垣の状況について概観する。

○4面石垣（Fig.8）

4面石垣は、天守台石垣（5面石垣）に接し、北側に延びる石垣である。調査開始前は、幅約5.2m、高さ約2.6mの範囲が確認できていた。調査時に石垣中央部分を掘り下げ、新たに埋没していた約3m³の範囲を検出した。石垣の勾配は約81.5°で、反りは認められない。築石の石材は、すべて花

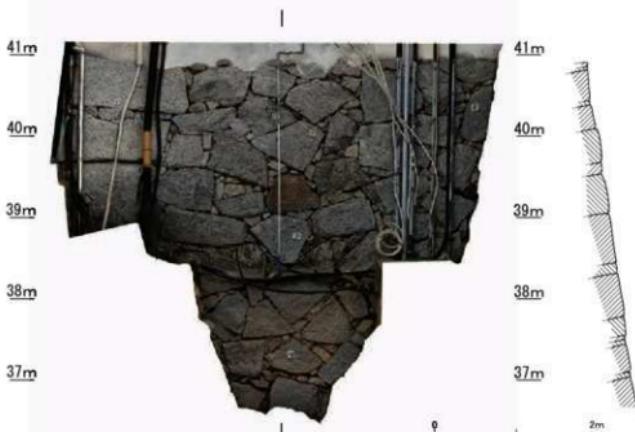


Fig.8 4面石垣立面オルソ図 (S=1/60)

こう岩の割石であり、天守台石垣など本丸南側の石垣に使用されている石材と同質である。

先述したが、Fig.4において、「石垣破損」とある。しかし、現況では4面石垣上部に大きな変状は見られず、石垣上には建物が造られている。このことから、昭和42年の模擬化粧構築の際に、天端から下に約1.5m程度は積み直されたものであると考えられる。

すでに露出していた部分の石垣は、間詰めが抜け落ち、石垣間の隙間が目立っていたため、石垣再建築工事の際に間詰石の施工を実施している。一方、埋没部分の石垣は、良好な間詰石の遺存が認められ、直径5cmに満たないものから20cm近い花こう岩を組み合わせ、隙間無く築石間が埋められている。なお、北壁断面にかかる根石は、断面図上では他の石材から約6cm前に出ており、最も加重のかかる根石を前に出して石垣を強固にする「控え出し」のように見て取れる。しかし、この根石は、正面左側がせり出しているが、右側は逆にくぼんだ様相を呈している。さらに、他の根石の前面へのせり出しは確認できない。よって、現状では、北壁断面にかかる根石の裏面に部分的な変状が発生している可能性を想定しておくに留めたい。

○5面石垣（Fig.9）

5面石垣は、天守台石垣の北縁をなす石垣である。調査開始前は、幅約3m～4.5m、高さ約7.8m

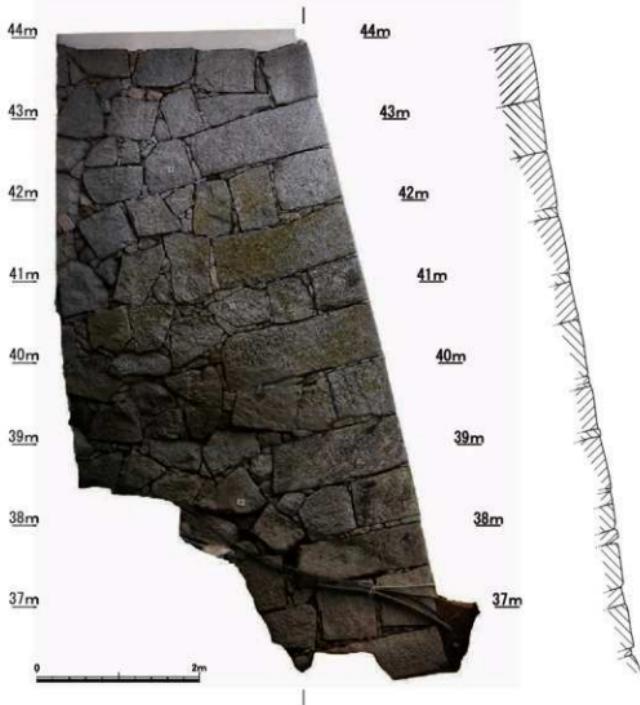


Fig.9 5面石垣立面オルソ図 (S=1/60)

の範囲が確認できていた。掘削によって、新たに2.5m²を検出した。石垣勾配は79°で、反りは無い。築石石材は、4面石垣同様に花こう岩の割石である。

5面石垣も当初からの露出部分は4面石垣の露出部分同様間詰石の抜け落ちが目立っていた。さらに、5面石垣の埋没していた新規検出範囲も4面の埋没範囲と比べ、間詰石の抜け落ち、石材間のゆるみなどによる空隙が目立つ。また、調査中は5面石垣内部からの隙間風が絶えず吹いており、内部の空洞化を想定させるものであった。

5面石垣と6面石垣の隅角部をなしている。向かって左に長い角の根石の稜線部分の底面から10cm程の範囲は、工具による最終調整を施されなかったと見られ、約2cm6面石垣側に飛び出している。これは、最終調整が施された稜線の範囲は、5・6面石垣の出隅部を構築する際の基準勾配となるのに対し、飛び出している範囲は、あえて削り残した部分であると考えられる。類似した状況は、本丸内の他の出隅部でも稀に見られる。一方、この根石の上に積まれる、向かって右に長い2石目の角石の勾配は、根石の稜線ともすでに異なっている。

○刻印

今回調査を実施した4・5面石垣のうち、5面石垣では埋没部分も含めた範囲で刻印を確認することは出来なかったものの、4面石垣では、埋没部分に3石、露出部分に3石を確認した。

確認した刻印は、天守台石垣など、唐津城跡内の石垣で普遍的に見られるもので、いわゆる「清明桔梗印」を掘り込むものが3石、井ヶタ状に4本線を掘り込むものが1石、円状の刻みの中央に小さな点を刻むものが1石、円状の刻みを横断して延びる一文字を彫り込むものが1石である。

(2) 土坑 (SK01)

東西土層観察畦にかかる形で、遺構面（3a層）を掘り込む土坑（SK01）を検出した。今回の調査で検出した唯一の江戸期の遺構である。北側をサブトレーンチ堀方・根かく乱によって削られているが、東西幅0.8m・南北幅1.2m程の全体プランを想定できる。検出レベルは、3a層と同様に標高約36.5mだが、上面はかく乱によって削られていると考えられる。土坑の中心から北側に0.4m程外れた土坑北側のサブトレーンチ内では、直径30cm程の石材を検出しているものの、柱を設置する礎石の役割を果たしていたとも考えにくい。なお、写真測量による記録作成後に半裁し性格の把握に努めたが、遺構の中心には石材の出土は見られず、性格の断定には至らなかった。遺構埋土には、瓦片が少量含まれていたが、時期の推定可能な軒丸瓦片は見られなかった。しかし、検出した江戸初期と推測される遺構面を掘り込むことから、SK01の帰属時期は江戸時代前期ごろであると想定しておきたい。

第5節 出土遺物

○陶磁器・その他

1～3は陶器。1は底部から胴部のみ残存する。立ち上がりは緩く、皿になるものか。見込みには厚く釉が施される。2は唐津焼。細片のため器種等は不明。外面に鉄軸で文様を描く。3は碗。口縁部から胴部にかけて残存し、外反せず上方まで立ち上がる。口縁部端は露胎。疊付は釉を剥ぎ、周辺に砂目が残る。胴部には植物文を描く。6・7は小杯。ともに疊付は露胎し砂目が残る。6は高台から口縁部まで直線的に開く。見込みには「太閤」銘が施される。7は高台から緩やかに立ち上がり、口縁部端はわずかに外反する。見込みには「酒名金盛」銘が施される。8・9は擂鉢片。8は素焼きで橙色を呈する特徴的な胎土を持つ。描り目は荒く不統一ある。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。丹波系のものか。9は備前擂鉢で、斉一的な描目が複数方向から施される。

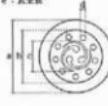
番号	層位(遺構名)	器種	法量(cm) 【口径・底径・高さまたは個別】	色調 【赤色・黒土色または内・外】	器形調整等 【内・外または特徴】	胎土	焼成	実測 No.
1	ST東2a層	陶器 瓢	無・無・(15)	緑・オーリーブ黄色・黒土・灰白色	施釉	施選されている	良好	4
2	1b層	陶器 不明	無・無・(32)	緑・灰白色・黒土・灰白色	施釉	施選されている	良好	5
3	ST東2a層	陶器 瓢	無・無・(31)	緑・灰黄色・黒土・灰白色	施釉	施選されている	良好	6
4	2a層	磁器 選	器皿(5.1)・無・器皿(2.6)	緑・灰白色・黒土・灰白色	施釉	施選されている	良好	7
5	1層	磁器 瓢	(3.3)・3.6・4.5	緑・明緑色・黒土・灰白色	施釉	施選されている	良好	1
6	"	磁器 小杯	(5.0)・1.95・3.0	緑・灰白色・黒土・灰白色	施釉(見込み式)・器付露胎	施選されている	良好	3
7	"	磁器 小杯	5.1・2.0・2.9	緑・白色・黒土・白色	施釉(見込み式)・外面部加工なし・器付露胎	施選されている	良好	2
8	1b層	陶器 韭搗	無・無・(33)	褐色	御目・指面圧痕	砂粒含む	良好	9
9	2a層	陶器 韭搗	無・無・(41)	赤褐色	御目・ヨコナラ後ナメハケ	砂粒多く含む	良好	8
10	2a層	軽丸瓦	a:(13.8), b:(9.2), c:(4.8), d:(1.5), e:(6.7), f:(2.0), g:(5.5), h:(3)	灰色	巴右巻き珠8つ・瓦当面露胎・コピキB	砂粒少量含む・金雲母含む	良好	20
11	1b層	"	a:(13), b:(5.0), c:(4.3), f:(1.3), g:(1.3)	緑	巴右巻き珠8つ	砂粒多く含む	良好	14
12	2a層	"	a:(13.7), b:(9.1), c:(5.2), d:(1.0), e:(2.0), f:(2.4), g:(0.5)	緑灰	巴左巻き珠8つ・瓦当面露胎	砂粒含む・金雲母含む	良好	11
13	1b層	"	a:(6.9), b:(4.2), c:(1.2)	灰色	巴左巻き珠8つ・瓦当面露胎	砂粒含む	良好	16
14	"	"	a:(12.8), b:(10.0), d:(1.0), f:(2.1), g:(0.8)	浅黄色	巴右巻き珠9つ	砂粒含む	不良	15
15	1c層	"	a:(10.7), b:(8.5), c:(5.7), d:(1.2), f:(2.4), g:(0.2)	緑	巴右巻き珠9つ・瓦当面露胎	砂粒多く含む	不良	12
16	ST東2a層	"	a:(11.5), b:(8.0), d:(1.0), h:(1.9)	灰色	巴右巻き珠9つ・瓦当面露胎	砂粒含む	不良	18
17	"	"	a:(13.0), b:(9.3), c:(5.3), d:(1.0), f:(1.8), g:(0.75)	緑灰	巴右巻き珠9つ・瓦当面露胎	砂粒含む	良好	17
18	SK01埋土	"	a:(16.1), b:(11.6), c:(5.3), d:(1.2), e:(11.7), f:(2.1), g:(0.6), h:(2)	灰黄色	巴左巻き珠11つ・コピキB・瓦当面露胎・御目・指面圧痕	砂粒含む・金雲母含む	良好	19
19	2a層	"	a:(13.7), b:(7.3), c:(4.6), d:(0.9), e:(9.0), f:(2.4), g:(0.5), h:(1.9)	灰色	巴右巻き珠12つ	砂粒含む	良好	13
20	1b層	"	a:(13.3), b:(8.2), c:(4.0), d:(1.3), e:(3.0), f:(1.9), g:(0.6), h:(2.1)	灰色	巴左巻き珠12つ・瓦当面露胎・コピキB	砂粒含む	良好	10
21	1c層	軽平瓦	a:(16.0), b:(11.0), c:(4.0), d:(2.3), e:(7.0), f:(1.7), g:(0.2), h:(2)	緑灰	中心飾り:鳥形三葉文	砂粒含む	良好	22
22	"	"	a:(19.0), b:(9.0), c:(4.0), d:(2.2), e:(9.2), f:(2.0), g:(0.3), h:(1.8)	灰色	中心飾り:鳥形三葉文	砂粒含む	良好	25
23	1b層	"	a:(11.0), b:(7.2), c:(3.6), d:(2.2), e:(2.2), f:(1.0), g:(0.3), h:(1.5)	黄灰色	中心飾り:上向五葉文	砂粒含む	良好	24
24	"	"	a:(17.0), b:(11.5), c:(3.7), d:(2.2), e:(9.0), f:(1.2), g:(0.3), h:(2)	灰色	中心飾り:上向五葉文	砂粒含む	良好	23
25	"	"	a:(16.0), b:(11.0), c:(3.4), d:(2.0), e:(11.3), f:(1.0), g:(0.25), h:(1.9)	緑灰	中心飾り:上向五葉文	砂粒含む	良好	26
26	"	"	a:(11.5), b:(7.5), c:(3.6), d:(2.6), e:(11.0), f:(2.5), g:(0.4), h:(2)	灰色	中心飾り:鳥形五葉文か	砂粒含む	良好	21
27	2a層	"	a:(10.2), b:(5.3), c:(3.6), d:(2.4), e:(15.0), f:(1.5), g:(0.5), h:(1.9)	灰色	中心飾り不明、支垂土向き下向き唐草文	砂粒含む	良好	27
28	"	盤瓦	長輪(9.3), 短輪(1.02), 厚み(1.0)	黄灰色	内外輪凹凸	砂粒含む	良好	28
29	"	瓦瓦か	長輪(8.5), 短輪(8.2), 厚み(5.5)	暗灰色・黃色	内面へラケズリ	砂粒含む	良好	29

Tab.1 出土遺物観察表

【瓦の計測位置】

【軽丸瓦】

a : 瓦面面積 b : 瓦面周囲
c : 色斑文 d : 瓦厚
e : 亂文様 f : 施釉部



【軽平瓦】

a : 瓦面面積 b : 瓦面周囲
c : 瓦面高 d : 瓦底面



出土瓦計測位置図

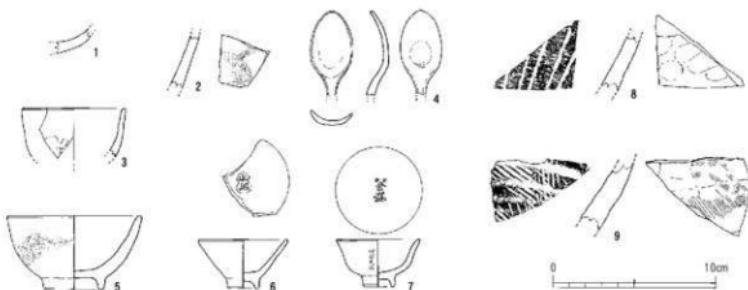


Fig.10 出土遺物実測図① (S=1/3)

○瓦

10～20は巴文を持つ軒丸瓦。10・11は巴が右巻きで珠文8つのもの。両者は瓦当面に同様の文様構成を持つが、11の方が瓦当面の径が大きく、珠文・巴文が肉厚で明瞭である。一方、10は珠文・巴文が明瞭ではなく、潰れたように摩滅しており、巴尾の一部も欠損している。内面には、布目痕の下にわずかにコビキBの痕跡が残る。

12・13は巴が左巻きで珠文8つのもの。12は丸瓦との接合部以上を欠損する。13は逆に瓦当面上部のみ遺存する。ともに巴頭は明瞭にくびれており、巴尾や珠文の一部が範傷によるものか、欠損している。13の内面には、部分的にナナメ方向の深い線が入る。

14～17は巴が右巻きで珠文9つのもの。巴の向き・珠文の数は一致するが、それぞれ異なる範型で作られたものである。14は瓦当面下部、16は瓦当面上部のみ遺存する。15・17はともに丸瓦との接合部分から下がる。17は丸瓦と瓦当面の接合のための調整痕跡まで明瞭に遺存する。14～16は焼成不良のような状態であり、14は浅黄色、15は橙色、16は灰色を呈し、発色が悪い。また、14の瓦当文様は比較的明瞭で肉厚なものであるのに対して、15のそれは非常に肉薄で文様の判別が困難なほどまで摩滅している。16も焼成不良の影響か、瓦当面に亀裂が走っている。17の焼成状態は悪くないものの、瓦当面が橢円状に歪んでいる。瓦当面上部の巴頭はほぼ摩滅しているほか、左下に位置する2つの珠文には範傷が確認できる。

18はSK01出土品。巴が左巻きで珠文を11持つ。体部から瓦当部に向けてラッパ状に広がる。明瞭にくびれた巴頭を持ち、巴尾は細長く2つ隣の巴頭付近まで延びる。珠文間には、部分的に指頭圧痕が見られる。内面には、布目痕の下に明瞭にコビキBが残る。

19は巴が右巻きで宝珠を12持つもの。非常に肉厚で、互いに近接する巴文を持つ。珠文の間には、部分的に範型を二度押したためか、ズレや潰れた痕跡を確認できる。内面には、わずかに残る布目痕の下に瓦当面に直交する幅広で深い凹線が残る。瓦当面全体にはキラコが見られる。

20は巴が左巻きで珠を12持つもの。明瞭にくびれた巴頭を持ち、巴尾は細く長い。珠文は大きく、巴頭とほぼ同じ大きさをもつ。巴文・珠文の一部に範ズレが確認できる。瓦当面全体にはキラコが見られる。

21～27は軒平瓦。21・22は中心飾りが鳥形三葉文を持つものであり、同范品である。下向き三連の唐草文を左右に配置した文様構成である。中心飾りは、中心軸と左右の支葉が独立しており、中心軸

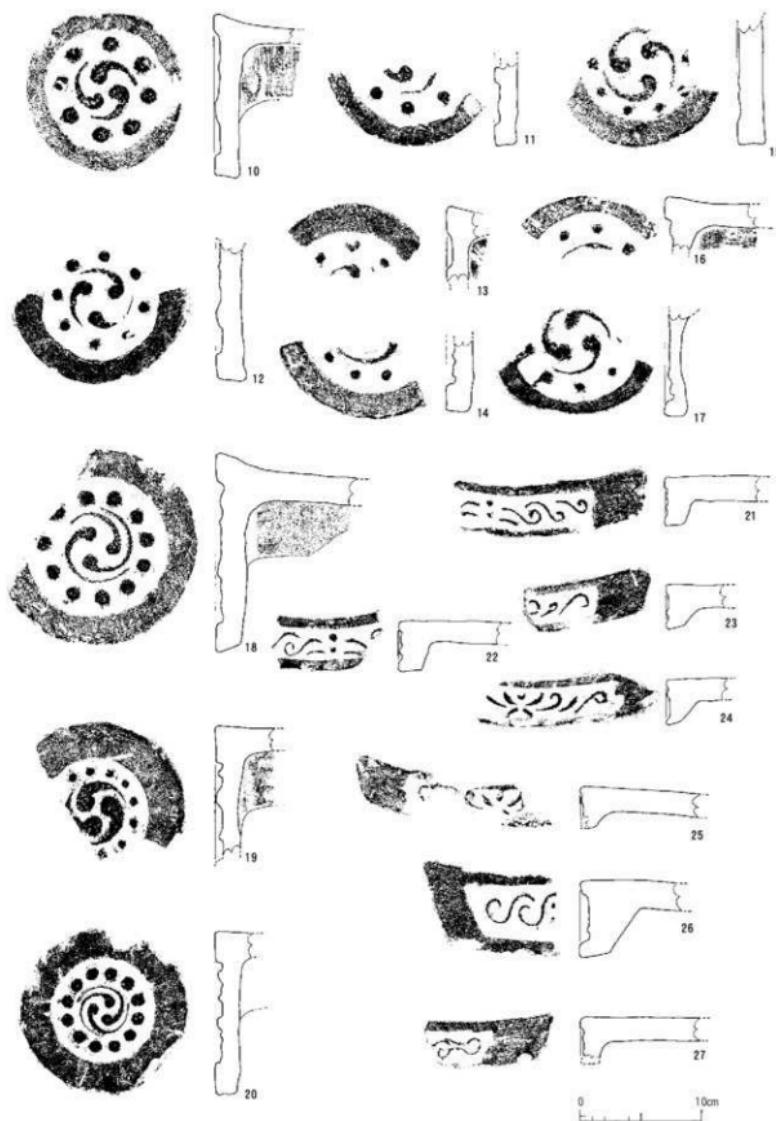


Fig.11 出土遺物実測図② (S=1/4)

は点を二つ並べたようである。

23～25は中心飾りが上向き五葉文をもつものである。24以外の残存状態は悪く、確証に欠けるがこの3点の瓦は少なくとも同系瓦と見られる。左右の唐草文は中心飾りから下巻き・直線・上巻きの支葉が独立して描かれるものである。中心飾りの上端の支葉がV字状をなす。

26は中心飾りを欠損するものの、向かって右側の唐草文の下に2つの点が残存しており、この2点は鳥形五葉文の支葉であると考えられる。

27も中心飾りを欠損する。範のズレのためか、上巻きの支葉の上から独立した下巻きの支葉が伸びているように、2つの支葉が連結しているように見え、範形の断定が困難である。

28は鰐瓦の鱗である。ゆるやかに反った形状を持ち、内外面に形状に沿った凹線を均一に彫り込む。内面側には四線に直交する2本線が見られる。

29は、鬼瓦片か。本丸では珍しい鬼面文の鬼瓦であろうか。向かって右下側（または左上側）の牙部分と推測される。裏面にはわずかに縦方向のヘラケズリの痕跡が見られる。

第6節 調査成果のまとめ

以下では、今回の調査によって得られた成果を整理することとしたい。

まず1点目は、4面・5面石垣の根石を検出し、本丸西側石垣の構築基盤が判明したことである。樹木の根によってかく乱を受けていたものの、4面・5面石垣の根石は、地山を削り出し、部分的にしまりの強い盛土によって設置角度を調整することによって、設置されていると推測できる。

2点目は、江戸期の遺構面を検出したことである。先述のとおり、検出した遺構面は、1～3面石垣前の調査で検出した遺構面とほぼ同様の標高36.5m付近であることから、天守台石垣北西部一帯は、ほぼ同じ高さの平坦面であったと思われる。また、遺構面の状況からは、6面石垣北側へ延長する石垣痕跡は確認できなかったことから、4面・5面石垣とともに築城当初から構築位置 자체は動いていないと考えられる。なお、調査区北側に延びる1～3面石垣では、石垣再築整備に伴う調査によって、複数回の石垣修復の可能性が判明している。一方、4面石垣でも現代に一度崩落していることが確実視できる。

残された課題としては、第Ⅲ章第3節でも述べたように、検出した遺構面の高さでは、4面・5面石垣根石の設置レベルとわずかに齟齬が生じていることを挙げておきたい。また、江戸期の盛土からの出土遺物の中で時期の把握ができるものはなく、かく乱からの出土遺物も江戸期～近現代と時期幅を持つため、今回の調査によって、石垣の構築時期を考察できる材料は得られなかつた。

今回の調査では、本丸北西部の状況について大きな情報を得られたものの、同時に現時点では判断が難しい課題も浮き彫りになったと思われる。課題については、今後の調査に期待したい。

また、末尾となりましたが、今回の調査にかかわられたすべての方々に深く感謝申し上げます。

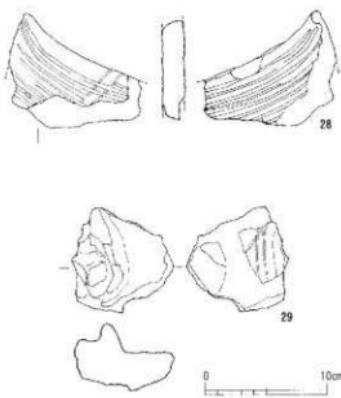


Fig.12 出土遺物実測図③ (S=1/4)



①2・3・6面石垣近景：S38年（南西から）



②2～4・6面石垣近景：現在（南西から）



③3・4面石垣近景：S38年（西から）



④4面石垣近景：S38年（西から）



⑤確認調査実施前近景（北西から）



⑥表土掘削業務終了後近景（北西から）



⑦東西土層観察畔撤去前状況（北西から）



⑧掘削完了状況（北西から）



①掘削完了状況（西から）



②4面石垣埋没部分近景（西から）



③5面石垣埋没部分近景（北から）



④5面石垣根石付近景（北から）



⑤・6面石垣隅部根石付近景（北西から）



⑥東西土層観察坑掘削完了状況（北から）



⑦SK01検出状況（北から）



⑧調査終了後調査区近景（北西から）



①調査終了後調査区近景（北から）



②4面埋没部分刻印拓本採取前（西から）



③4面埋没部分刻印拓本採取後（西から）



④陶磁器類外面（Fig.10-1~9）



⑤陶磁器類内面（Fig.10-1~9）



⑥軒丸瓦瓦当面（Fig.11-10 ~ 13）



⑦軒丸瓦裏面（Fig.11-10 ~ 13）



⑧軒丸瓦瓦当面（Fig.11-14 ~ 17）



①軒丸瓦裏面 (Fig.11-14 ~ 17)



②軒丸瓦瓦当面 (Fig.11-18 ~ 20)



③軒丸瓦裏面 (Fig.11-18 ~ 20)



④軒平瓦瓦当面 (Fig.11-21 ~ 23)



⑤軒平瓦瓦当面 (Fig.11-24 ~ 25)



⑥軒平瓦瓦当面 (Fig.11-26 ~ 27)



⑦鰐瓦・鬼瓦外面 (Fig.12-28 ~ 29)



⑧鰐瓦・鬼瓦内面 (Fig.12-28 ~ 29)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	からつじょうあと（IX）						
書名	唐津城跡（IX）						
副書名	唐津城天守閣空調設備室外機設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第176集						
編著者名	立谷聰明						
編集機関	唐津市教育委員会						
所在地	〒847-0013 佐賀県唐津市南城内1番1号 大手口センタービル6階						
発行年月日	平成30年2月28日						
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 北緯	東経 東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
からつじょうあと 唐津城跡	佐賀県 唐津市 東城内	412023	33°27'13"	129°58'40"	20170424 → 20170517	18	空調室外 機設置基 礎の施工
所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
唐津城跡	城館	江戸時代	石垣 土坑 包含層	陶磁器 鬼瓦・鰐瓦 軒丸・平瓦	天守台石垣北 側の根石を検 出した。		
要約	唐津城跡本丸では、平成20年度から継続して、石垣の解体を伴う石垣整備事業を実施しており、その築城時期について一石を投じるような調査成果があがっている。今回の調査地点は、解体調査を実施していない天守台石垣北側の裾部分にあたる。調査成果としては、現況の地形とは異なる江戸期の遺構面の様相を考察する情報が得られたとともに、天守台石垣の根石を検出したことによって、天守台の構築方法の一端を明らかにすることができた。						

唐津市文化財調査報告書 第176集

唐津城跡（IX）

—唐津城天守閣空調設備室外機設置に伴う文化財調査—

2018年2月28日印刷

2018年2月28日刊行

発行者 佐賀県唐津市南城内1番1号
唐津市教育委員会

印刷者 佐賀県唐津市江川町702
呼川プリント

発掘現場から



POWER OF CULTURE